

2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻は、改めて原発の脅威を明らかにした。ロシアは侵攻後、いち早くチェルノブイリ原発を占拠した。その主張は、「ウクライナがここで核兵器の開発をしている」という、根拠のないものだった。実際は、ここを拠点に首都キエフを狙った軍事作戦と、原発の放射能を脅しの道具にしたのだった。原発はかねてから、テロや戦争に際して極めて危険な存在だと言われてきたが、そのリスクは改めて世界的に認識された。

チェルノブイリ原発の外部電源遮断

ロシア軍はチェルノブイリ原発を占拠後、職員211名を人質にし、原発を管理させていたが、過労で倒れるスタッフも出て、3月9日600時間ぶりに半数を交代させた。この間、チェルノブイリ原発の外部電源ケーブルを切断した。チェルノブイリで1986年に爆発したのは4号炉で、1～3号炉は2012年まで稼働していたので、同原発構内には約2万本の使用済み燃料が冷却プールに貯蔵・冷却中である。現在は発電していないので、冷却用ポンプは外部電源に頼っている。ロシア軍は、この外部電源の送電線を切断し電力供給を絶った。稼働停止から時間を経っているので、爆発事故は起こらないかもしれないが、冷却水が蒸発し、燃料棒が露出・損傷すれば周辺地域の放射能汚染は避けられない。緊急用の自家発電装置は48時間しか持たない。2日後にロシア軍は、ベラルーシからの電線をつないで冷却を再開した。これはロシアによる明らかな脅しである。私たちが永年支援してきたウクライナのナロジチ地区は、チェルノブイリ原発に近く、一時どうなる事かと緊張した。

ザポロジエ原発の爆撃

更に戦慄すべき事態が、ウクライナ南東部にあるザポロジエ原発で発生した。ロシア軍は、まだ稼働中のこの原発を爆撃し火災を発生させた。ザポロジエ原発は、稼働中の原子炉が6基あり、ウクライナだけでなくヨーロッパでも最大規模である。幸い爆撃は、作業員の研修施設の破壊・火災ですんだが、もし爆弾が管理棟にでも命中したら、想像できない事態になった筈である。ここの原子炉燃料はチェルノブイリ

4号炉の10倍もあり、もし爆発したらチェルノブイリの比ではない事態が発生しただろう。例えば、放射性セシウムの量で比べれば、チェルノブイリ4号事故では広島原爆の500倍のセシウムが飛び散り、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアは勿論、ドイツやイタリア・フィンランドなどヨーロッパ全域を汚染した。もしザポロジエ原発が爆発すれば、広島原爆の5,000倍のセシウムが、ヨーロッパだけでなく地球レベルの汚染をもたらしたかもしれない。この事態は、戦争やテロによる原発の危険性を改めて浮き彫りにした。ロシア軍は、今もザポロジエ原発を占拠しており、今後も脅迫の手段にする可能性がある。

原発のテロ対策は役に立たない

現在、国内の原発のテロ対策に対し、原子力規制委員会の認可が必要だ。が、その内容は外部電源の分散化や可搬型の電源車・ポンプ車の配備などが義務つけられているだけで、爆弾投下やミサイルによる爆撃には全く役に立たない。大量の使用済み燃料プールは原発建屋の最上階にあり、福島原発事故では水素爆発で屋根が吹き飛んだ事実がある。福島の4号炉は停止中だったが、建屋の使用済み燃料プールの水が無くなり、再臨界による爆発の危険が専門家の間では恐怖を呼んだ。

原発は事実上の核兵器に成り得る

今回のロシアによるウクライナ侵攻は、改めて原発の危険性を露わにした。原発と核兵器は双子の兄弟である事を心に脱原発を。

(2022年3月24日 河田)